
ファンタジア

戌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ファンタジア

【Nコード】

N1104F

【作者名】

戌

【あらすじ】

進路、恋愛、友達と・・・いろいろな悩みを抱えたごく普通な中学生が別世界に飛んで行ってしまった！魔法にモンスター、剣に妖精なんでもでてくる世界に戸惑いながらも確実に、しっかりと成長していく彼ら。帰る方法はあるのか？

プロローグ（前書き）

へたくそで読みづらいかもしれませんがどうぞよろしくお願いします。

プロローグ

夏が過ぎ、涼しくなってきたこのごろ、騒々しい教室に三人の男女の姿があつた。

「凜太郎^{りんたろう}。進路^{しんろ}どうする？」

凜太郎と呼ばれた少年は顔を上げた。

「…うん。どうだろう。舞子^{まいこ}はどうだ？」

急に話題を振られた舞子は窓の外を見て言った。

「わかんない。そんなの決めてる方がめずらしいんじゃないの？
ねえ修平^{しゅうへい}？」

「イヤ、みんな結構決めてるらしいよ。」

修平はスポーツ刈りの頭をかきながら答えた。

昼下がりの午後、中学三年生の三人は場所に似合わず暗い話をして
いた。

「…眠い。」

凜太郎は瞼^{まぶた}が重くなるのを感じた。

「おいおい。」修平と舞子は顔を見合せて笑った。

凜太郎がポケットに入れていた進路希望調査のプリントが床に落ちたが拾う気にはなかった。

プロローグ（後書き）

読んでいただきありがとうございます。

題名と関係ある？と思った方もおられると思いますがこれからゆったり書いていきたいと思っています。

1 話眠眠打破（前書き）

誤字脱字があればおしえていただけたら助かります。

1 話睡眠打破

「……であるからして $y \parallel 3x$ の y の値が……」

あ、もう授業はじまつてる。

凜太郎は腕のよだれをぬぐい、姿勢を起こした。

「数学数学つと……」

机の中から数学の教科書とノートを取り出しパタンと机の上に置いた。

その音に気付いたのか数学の教師佐藤が黒板に数式を書いていた手をとめ、こちらを向いた。

「やっと起きたか岩崎^{いわやま}。よし、眠気ざましにこの式の a の値を言え。」

言うまでもなく岩崎というのは俺のことだ。

そしておれは数学が嫌いな、午後の授業の眠たさに勝てないどこにでもいる中学三年生の男子だ。

「えーつと……。わかりません。」

「……まったく。じゃあ……。山下。 a の値はなんだ？」

メガネをかけた地味な男子生徒が低い声で答えた。

凛太郎はターゲットが自分から外れたことにほっとして、隣の吉原よしは舞子に話しかけた。

「おれ、いつから寝てた？」

頬杖ほおづえをついて授業を受けていた舞子はこちらを向いた。

「んー・・・と・・・。たしか、昼休みの終わりから。」

今は6時間目らしい。あゝ・・・結構寝てる。

・・・お、もうすぐ終わりじゃん。ラッキー！

もう一眠りしよう・・・。

「ねるんかい！」

舞子のツッコミが聞こえたが無視。

つか、人の心読むな舞子。

こうして凛太郎はふかい眠りについていった。

1 話眠眠打破（後書き）

よんでいただきありがとうございます。
あとがき少なくてすいません。

2 話 確 率

「・・・はっ!!」

「はっ! つじゃねえよ。本当にお前はねてばかりだな。」

凜太郎はあのあと結局放課後になるまで寝ていた。

いつもならこのあと部活があるのにもうほとんどの部活の三年生は引退していて、帰るしかなかった。

「凜太郎。俺ん家来る?」

「行く行く。修平の家か。結構久しぶりだな。」

修平と舞子は幼稚園から一緒にの俗にいう幼馴染というやつで、昔は三人でよくあそんだ。今は誰かの家に集まることはない。

「そっぴや、舞子は?」

「たぶん、舞子は千鶴ちゃんたちとかえったんじゃない?」

千鶴ちゃんとは小学校の4年生のときに引っ越してきた子で、舞子とは性格はま逆でおしとやかだ。それでも二人はものすごく仲がいい。

そして、おれは千鶴ちゃんが引っ越してきたその日から好きなのだった。

「へ・・・じゃあ行くかあ。」

「ああ。」

・・・・・・・・・・・・・・・・

修平の家はおれの家になかなか近い。

それに、一軒家なのでマンションとかの階段を昇る面倒臭さがない。

「あら、凜太郎くんいらっしやい。」

「あ、お邪魔します。」

修平の部屋は二階にある。

「いつきても、きれいな部屋だなあ・・・。」

「普通だつて。」

謙遜して笑う修平は缶ジュースを二つ持ってきた。

「ブドウとオレンジ、どっちがいい？」

「オレンジ。」

オレンジのジュースをうけとり、一気に飲み干した。

「こんなふうに遊ぶことももう無くなつていくのかな・・・。」

ゲームをしていて修平はつぶやいた。

「そんなことないって。」

否定はしたがおれもそのことについては考えたことがある。

「これからは受験勉強もしなきゃいけないし、高校も違うところになるかもしれないし……。」

たしかにそうだ。修平ははっきりいって頭がいい。学校の中でもトップクラスのほうだ。

舞子もおれよりは頭がいい。

三人が一緒の高校に行く確率は5パーセントにも満たない。

そのあとおれは修平の家をあとにして、家に帰った。

2 話確率（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

あと2・3話ぐらいでそれっぽくなる予定です。
これからもよんでいただけたらなと思います。

3 話 燃焼系（前書き）

舞子視点です。

3 話 燃燒系

「舞ちゃん。一緒に帰ろう。」

千鶴ちずがこちらを見ている。

「いいよ。」

あたしはかばんに筆箱を突っ込んで、かばんのふたを閉めてたちあがった。

下駄箱げたばこのところで千鶴の靴置場から紙のようなものがひらひらと落ちた。

その紙は千鶴の足もとにパサリと落ちた。

「何それ？」

「んー……。手紙みたい。」

「見せて見せて。」

差出人は山下正則やましたまさのり。・・・だれだっけ？

「中身はなんて書いてあるの？」

『好きです。付き合ってください。』

「……………」

「・・・ス、ストレートだねえ。」

「う、うん。」

千鶴はとてもモテる。告白してくる奴はざらにいる。現場を見たことは何度もある。

「どう断ろう・・・。」

「そんなの『私は凜太郎がすきだから無理!』っていいばいいの!」

おどおどしている千鶴にあたしはどーんと言ってみた。

千鶴は赤面してしまった。

・・・そういえば凜太郎も千鶴がすきなんだっけ・・・。
まったく、ちゃっちゃとコクっちゃえばいいのに・・・。

「舞ちゃん。凜太郎くんには言わないでね。」

「わかってるって。」

「ありがとう。舞ちゃん。」

「じゃ、帰ろうか。」

靴を履いてつま先でトントンと地面をたたく。

千鶴の家はあたしと同じマンションの3階。

ちなみにあたしは2階。つまりご近所さんってこと。

マンションの手前で誰か立っている。学生服を着ているから同級生かな、と思いながら近づいていくと

「田中さんっ!!」

と呼びとめられた。

正確には千鶴が呼び止められて、あたしもついでに止まっただけ。

「な、なんですか?」

千鶴はおびえている。

・・・つか。こいつ誰?

「田中さん。手紙の返事を聞きに来ました。」

ああ、こいつが山下か・・・ってクラスメイトだし。

「あ、あの・・・すいません。」

言い終えた千鶴は走ってマンションに駆け込んだ。

「ご愁傷様。」

と、真っ白に燃え尽きた山下に捨て台詞を吐いて、マンションに入った。

3 話 燃焼系（後書き）

女の子視点で小説をかくのってむずかしいです。

千鶴ちゃん・・・うらやましいです（笑）

4 話四人の睡眠

「熱いつ！」

緑色の巨大なトカゲ、いや・・竜？が火を吐いた。

火はあたり一帯をつつみこみ逃げ道はなくなった。

「くそっ！どーなってるんだよ！」

竜は爪を立てて突っ込んでくる！

まずい！

凜太郎は身構えた。

・・・・・

布団があせでぐっしりしていた。

「・・・またあの夢か。」

このごろ同じ夢を見る。

ビデオを再生しては巻き戻しを繰り返しているかのような感覚だった。

奇妙な感覚のまま学校へ向かった。

途中で修平に会って、思い切って言うてみた。

「最近、変な夢をみるんだ。」

「奇遇だな。おれも最近へんな夢をみるんだ。」

そこに舞子と千鶴ちゃんが現れた。

「おっはよー。なににー？何の話だー？」

「いや、最近、変な夢をみるんだ。」

「え・・・それどんな夢？」

気のせいだろうか、舞子の顔がすこし緊張したような雰囲気になった。

「竜みたいな生き物が火を吐いて襲いかかってくるんだ。」

「あ、それあたしもみるよ」

軽っ！そして、ええっ！！

心の中でツツコンでいると、誰かが肩をたたいた。

「わたしもそれ・・・みたことがあるの。」

千鶴ちゃんまで・・・。

でもこのときはだれもがただの偶然だとおもっていた。

時は変わって昼休み。

校庭の大きな木の木陰で昼寝をしようと木へと歩いていたら

「どこいくの？」

と、舞子たち、朝の三人に呼び止められた。

「昼寝だけど……。」「

「おつ。いいね。あたしたちもいつでもいい？」

視界に千鶴ちゃんがいっぱいいた。

「いいよ。」「

……。こうして四人は大きな木のもとへ昼寝をしにいった。

木を取り囲むような形で四人は木にもたれかかった。

そして、凜太郎は深い眠りについた。

4 話四人の睡眠（後書き）

呼んでいただきありがとうございます。もしよければ感想などもきかせてください。

5 話目覚め（前書き）

校庭の木の下で昼寝をしていた四人は・・・

5 話目覚め

目がさめるとそこは見慣れない草原だった。

校庭と同じなのは今もたれ掛かっている大木だけ。

目をゴシゴシこすっていると左肩に重さを感じた。

千鶴ちゃんがおれの肩にもたれ掛かっていた。

無理に動く訳にいかず、あたりを見渡していると、舞子と修平の姿が見えないことに気がついた。

「うーん・・・。」

千鶴ちゃんが起きた。

起きたのと同時にもたれかかっているのに気づいて赤面した。

「・・・わわわっ！ごめんね！わたしってば・・・。」

「イ・・・イヤ、かまわないよ。けどそれよりここは・・・？」

「おーい。イチャイチャしてるか？」

舞子と修平が森の奥から出てきた。

「舞ちゃん！」

千鶴ちゃんはりんごのような真っ赤な顔になってしまった。

俺も顔が赤くなってたかも・・・。

「なあ、ここはどこなんだ？」

修平たちにきいてみた。

「日本・・・ではなさそうだな・・・。」

修平は難しい顔になった。

「じゃあ、二人でどこ行っていたの？」

千鶴ちゃんが聞いた。

「あたしがおきたら、あんた達が寝ててしかたないから修平をたたき起こして、探検してた。」

「あっそういえば、さっき村みたいなところがあったんだ。そこに行ってみよう。」

そうして、修平と舞子のあとをあるいた。

そのときも千鶴ちゃんはおれと目を合わせようとしなかった。

そんなことをしているうちに修平があるくのをやめた。

「どうした？」

修平はまた険しい顔になっていた。

「あれ。夢にでてきたやつじゃないか？」

修平は空を指さした。

そこには空を飛んでいる影があった。

5 話目覚め（後書き）

展開早いです。

6 話魔法とドラゴン

「あれ……。」

空を舞うあの姿は夢に出てきた竜そのものだった。

「ちょっとちょっと！こっちきてるよ！」

舞子のいうとおり竜はこちらへ飛んできた。

「まじかよ……。」

修平が苦笑いをうかべて呟いた。

「どーするのー！」

三人とも凜太郎を盾にする形でしがみついた。

そうこうしているうちに竜は地上に降り立った。

「とりあえず……。逃げろ！」

凜太郎の声を合図に四人は走り出した。

竜は逃げる標的に火の塊を吐いた。

火は凜太郎へ向かって飛んでいった。

「凜太郎クン！！」

凜太郎の立っていたところで爆発が起こった。

煙がもくもくとふくらむ。

「凜太郎！」

修平は凜太郎の元へかけていった。

煙がはれあたりが見渡せる程度になった。

「凜太郎！生きてるか！」

凜太郎は球体のバリアーのようなものの中にいた。

「い、生きてる……。」

そのとき二人の前に見知らぬ男が現れた。

何が起きているか理解出来ないという顔をしている二人の前に男がさげんだ。

「ボヤボヤするな！さっさとにげるぞ！」

男は二人をひょいと抱えて走り出した。

「あつ、あの。他に二人いるんですけど。」

男は鼻を鳴らした。

「抜かりはない。あの二人は相棒がどうにかしてる。」

竜は男を追いかけて来た。

「来るか・・・。」

竜は意外と速かった。

男は立ち止まり、俺達を乱暴におろして、何やらぶつぶつ呟きだした。

「全知全能の神オーディーンよ彼奴^{きやつ}へその力をふるえ！」

「詠唱だ・・・。」

ゲームが好きな修平はこれが何かを知っているらしい。

「さっき凜太郎についていたバリアもそうだ。きっと魔法が使えるんだ。」

男の詠唱が終つたらしく男はカッと目を見開いた。

「出でよ！グングニル！」

そういったかとおもえば、空から巨大な棒・・・いや、槍が現れ、竜を地面に張り付ける格好で貫いた。

竜の悲鳴が響き渡った。

「すつげえ・・・。」

「急ぐぞ、長くは持たない。」

関心している俺らにおとこは言った。

「とりあえず俺の村に行く。異論はないな？」

「あ・・はい。」

男は二十代後半ぐらいでマントを着て、腰に刀の様なものをさしている。

しかも、足が速い。学校のサッカー部のエースよりはやいだろう。

しばらく走っていると門のようなものが見えた。

「あそこがコイラだ。」

「コイラ？」

「なんだ知らないのか？・・まあ田舎だからな・・。」

男はがっかりしたように言った。

門の前に到着すると門番が男に話しかけた。

「なんだラヴェル、そいつらは？」

「森でドラゴンに襲われてたのを助けた。」

「そうか・・・災難だったな・・・」

「とりあえず旅人らしいし村長のところへ通そう。」

門番のひとに連れられて村の中でも一回り大きな家に通された。

「凜太郎！修平！」

そこには舞子と千鶴ちゃんがいた。

「無事でよかった・・・」

千鶴ちゃんが胸をなでおろした。

「旅人など何日ぶりのう・・・何もないところじゃがゆっくりして行ってくれ。」

「あ・・・はい・・・」

「よく見ると変わった格好だな。どこから来た？」

男・・・いやラヴェルが聞いてきた。

修平はこれまでのいきさつをあらいざらい話した。

「・・・にわかには信じがたいが、ようするに君らは違う世界からこっちの世界に来たと・・・」

門番の男が言った。

「まあ、そういつことです。」

「まあ、とりあえず今日はもう遅い。泊まって行きなさい。」

村長の好意で泊めてもらうことにした。

6 話魔法とドラゴン（後書き）

急にファンタシーになってきました。

まあ一応ファンタシー部類にはいつてますので・・・。

さて今回でできたラヴェルさん。

呪文を唱えるときを書くのはすごくはずいです。

感想など頂けたらなと思います。

7 話壊れた修平（前書き）

四人はドラゴンに襲われていたところを男ラヴェルにたすけられ、村長の屋敷に通された。

7 話壊れた修平

あのと夕食をごちそうになることになった。

ラヴェルさんと門番さんは家に帰ったらしい。

そういえば千鶴ちゃん達を助けた相棒って…？

まあいいや。

食卓に並んだ料理は見たことのないねのばかりで一瞬ぎょっとしたがたべると結構いける。

「これ何ですか？」

スープの中に肉片が入っていて、とても美味しいのでお手伝いさんに聞いてみた。

「それはね・・・聞きたい？」

聞きたい？のところでは声を低くしていったものだからなんだか聞く気がうせてしまった。

「・・・やっぱりいいです。」

一通り料理を食べたあと村長さんが風呂を勧めてきた。

「風呂に入ってさっぱりしてきなさい。リリイはいるか？」

「はい。」

お手伝いの方が返事をした。

「リリイ、この人たちに着替えを用意してあげなさい。」

「はい。お爺さん。」

あ、村長の孫なんだ。

それにしても、リリイさんは近くで見るとなかなかきれいな人だ。

容姿端麗といったところか、見とれる男だって・・・ってええっ！！

修平がリリイさんの横顔に見とれている。

しかも向こうのテーブルでは舞子がなんか面白くない目でこちらを見ている。

なんなんだよー！

そうして風呂にはいつている間も修平はデレデレした顔のままだった。

着替えはリリイさんや村長が着ているような麻の服だった。

「お似合いですよ。」

とリリイさんに言いわれたときなんか顔が俺にもたれかかっていた時の千鶴ちゃん以上に真っ赤っかだった。

そうして今日はもう休むということになり、ベッドのある部屋に通された。

「なあ、凜太郎。」

隣のベッドの修平が話しかけてきた。

時計がないのでわからないがだいたい深夜過ぎだろう。
千鶴ちゃんと舞子はとなりの部屋で寝ている。

「なんだ？」

おれは体を起こした。

どうせリイさんのことだろ……。と思っていたら

「もし、もしも帰れなかったらどうする？」

とシリアスな話題だったので少々驚いた。

うつむき加減に修平はつぶやいた。

「・・・わからない。けど、なんとかなるって。まあ帰ったら帰ったでいろいろ面倒くさいことばかりだけどな。」

元気づけるつもりで言ったのだが修平はなんだか落ち込んでしまったような様子だった。

「まあ、きょうはもう寝よう。」

布団をかぶって寝ようとした。

「ああ、おやすみ。」

修平は変だ。けど眠い。とりあえず長い滞在になりそうだしゆっくり聞いている。

「俺は帰らなくてもかまわない。」

薄れゆく意識の中で、そう聞こえた気がする。

そこまでリリイさんが好きなのか・・・。

7 話壊れた修平（後書き）

修平の壊れ方は独特です。

最後の一言まで壊れているかどうかは確かではありませんが・・・。

コメントいただけたらな、と思いながらここいらでお暇させていただきます。

8 話別荘？（前書き）

千鶴視点です。

8 話別荘？

朝になった。

いつもの部屋に戻っていることを願って目を開けてみたけどやっぱり昨日と同じ部屋だった。

となりでは舞ちゃんがいびきをかいて寝ている。

・・・へそ出てるし・・・。

かけ布団が床に丸まって落ちていた。

この世界にも鏡はあるらしく寝癖をなおしていたら、舞ちゃんが起きてきた。

「おはよう。千鶴。」

目が開いていない顔でそうやってきた。

「おはよう。舞ちゃん。」

舞ちゃんの髪は短い。いわゆるショートカットだ。

その髪がすべて立ち上がってドラ・ンボールだっけ？あれのキャラクターみたいになっていた。

舞ちゃんが朝に弱いことは小学校の修学旅行で一緒の班だったので知っている。

凜太郎くんはどんなのかな・・・。

「なに？朝から凜太郎のこと考えてんの？」

「ばっ！ち、ちがうってば！」

舞ちゃんは鋭い。

本人曰く心を読むのだそうだ・・・。
私にもそれが出来たらなあ・・・。

「できたらどうすんの？」

「勝手に心を読まないで！」

そうして、いつも朝する事を一通りすませると部屋の戸をノックする音が聞こえた。

「あ、リリイさん。おはようございます。」

「おはよう。千鶴ちゃん。舞ちゃん。」

女の子でも見とれるような笑顔でリリイさんは私たちに言った。

「朝ご飯の準備ができたから、降りてきてね。あとお爺さんが朝ご飯の後に、話があるから部屋にきてって。」

そういうとリリイさんは階段を降りていった。

食卓では修平クンと凜太郎クンが席についていた。

対極的な二人は見ていておかしかった。

凜太郎くんが目がろくに開いておらずパンをもそもそと食べているのに対して、修平くんはガツガツとパンを食べている。

私たちも席について朝ご飯を食べ始めた。

パンをちぎってスープにつけて食べるのがおいしいとリリイさんに教えてもらって、スープをもらうと言われたとおりにすると、とてもおいしくてパンをいつもよりたくさん食べてしまった。

みんなが一通り食べ終わったのを見計らって、村長さんの部屋へ行った。

「昨日は眠れましたかな？」

村長さんの部屋はほかの部屋より一回り大きくて部屋の真ん中にテーブルが置いてある。

「あんたたち、これからどうするのか決めておるのかね？」

厳しい質問だった。

私たちはこの世界について何も知らないし、そもそもどうしてここに来たのかすらわからない。

応えに戸惑っていると、村長さんが口を開いた。

「あんたら、村にとりあえず身を置いてみたらどうかかと、いつでもこの家はさすがに狭い。村にひとつぐらい空家があるからそこ

を使ってみたらええ。」

「・・・どうする？」

「・・・これ以上お世話になるのはマズイって。」

「いや、でも俺らはどこに何があるのかも分かんないんだぞここは甘えて・・・。」

「でも・・・。」

・・・と、相談した結果。

「ご厚意に甘えさせていただきます。」

凜太郎くんがみんなを代表してお礼を言った。

「うむ、そうするとええ。あと、食事についてじゃがこの村も豊かではない。きつちりはたらいでもらうからな。」

そういうとリリイさんが私たちの新居へ案内した。

その家はキャンプのときの家、バンガローだっけ？丸太をたくさんくつつけたみたいなお家だった。と、いつでもこの村の家すべてがそんな感じの家だった。

「必要な家具はすべて家に運んであるけど、必要なら遠慮なく言つてね。」

中に入ると部屋を確認した。

居間、浴室、トイレ、ペットルーム・・・。

「食事はうちにきてくれればいいから。・・・じゃあ、またあとでね。」

そのあと私たちはベットルームへ行った。

「さてと誰がどれに寝る？」

ベットはちょうど四つあった。

うん・・・どこにするかな・・・って！

「え！？四人一緒の部屋で寝るの？」

「べつにいいじゃん。」

と舞ちゃん。

「じゃあ誰がどのベットで寝る？」

と、修平くん。あれ？よくみたら舞ちゃんと修平くんしか会話してないや。凜太郎くんは・・・？

・・・部屋の入ったすぐのところの左のベットで爆睡中・・・。

話し合いの結果、左側を男の子、右側を女の子が使うことになった。

そのあと凜太郎くんは朝になるまで寝ていた。

8 話別荘？（後書き）

できれば感想や評価などをおくってみてください。

9 話町に行こう

ん？

朝？

・・・そうだ。昨日ここにきてそのまま寝たんだった。

目が開かないまま体を起こした。

洗面所にいつてかおを洗い、テレビを・・・あ、無いんだった・・・。

しかたないのでもう一眠りするか・・・。

寝室に戻るとさっきは気づかなかったが、みんな寝ている。

今何時ぐらいなんだろう？

時計がないって不便だな・・・。

ベットに入ろうとすると千鶴ちゃんがそこにいた。

あ、間違えた。

って。あれ？みんな一緒に寝てんの？

ふたたびベットに目をやるとそこには天使のような千鶴ちゃんが寝ている。

かわいい・・・

そのとき

「凜太郎オ！」

びびった・・・。舞子が寝言を言ったただけだった。

あー、だめだ。だめだ。さっさと二度寝を・・・。

「り、凜太郎クン・・・？」

舞子のバカでかい寝言は千鶴ちゃんを起こしてしまった。

枕元に立っている俺は確実に変な奴って思われた・・・。

死にてえ・・・。

そのあと二度寝などできるわけが無くきまらずい空気の中残りの二人を待った。

二人が起き出すのにそこまで時間はかからなかった。

神様ありがとうございます・・・

そのあと四人で村長の家にいって朝食をとった。

朝食の時もお互い目があつとそらしてしまった。

五つ目のパンに手をのばしたときドアが開いた。

ラヴェルさんだった。

「凜太郎、修平、千鶴、舞子。これから町に行くが、ついてくるか？」

町？この世界にもあるのか？

「あ、でも今日はリリィさん達と薬草を摘みに……。」

「あ、べつにいいのよ、二人いれば十分だから。」

「俺は残る!」

もちろん修平だ。

「あたし行ってみたい。」

これは舞子。

これで千鶴ちゃんと一緒になることはない。

ほっとして胸をなで下ろすと

「ありゃ？どうした？いつもならここは残念がるところだぞ?」

修平がにやにやしながら行ってきた。

「うるさい……。」

「私は残ってリリィさんのお手伝いをします。」

千鶴ちゃんはそういえばひとこみが苦手なんだっけ……。

修平がにやにやしながら行ってきた。

「うるさい……。」

「私は残ってリリィさんのお手伝いをします。」

千鶴ちゃんはそういえばひとこみが苦手なんだっけ……。

と、いうわけで。舞子とおれは町に、千鶴ちゃんと修平は薬草摘みに行くことになった。

ラヴェルさんと村長の家をでるときも千鶴ちゃんは目をあわさなかった。

……嫌われたかな……。

そう思うとなんだか悲しくなってきた。

ラヴェルさんに連れられて門のところまできたとき

「あ、歩いていくの？」

まじかよ……。とでもいいたげな舞子がため息をついた。

「まさか、町まで歩いていったらついた頃には真っ暗になる。こいつに運んでもらう。」

ラヴェルさんの指さした方向にはこのまえのドラゴン！……よりかなりちいさな竜が二頭いた。

この前のは十数メートルあったのに対しこの竜は1メートルぐらいしかない。

「あ！このまえの！」

「そういえば女の子達はいいつらに助けてもらったんだっとな。」

「じゃああのときの相棒っていうのは……。」

「ああ。こいつらのことだ。」

竜はしつけられていて吠えたりすることはなかった。

「よし、おまえ達はそっちのドラゴンに乗れ。」

ちなみにドラゴンと竜の違いがこの世界にはあるらしくドラゴンは野生によく見られる動物をさし、竜は神聖なドラゴンのことを言うらしい。

というわけで竜改めドラゴンの背中に乗ってみた。

緑色の鱗のところはつるつるしていた。

ラヴェルさんも片方のドラゴンに乗った。

「いくぞ。」

ラヴェルさんの声を合図にドラゴンが翼を広げた。

しばらく風の音がしたかと思うとドラゴンとともに空を飛んでいた。

「す……」

後ろで舞子がつばやいた。ラヴェルさんは先を飛んでいた。

そういえば元の世界はどうなってんだろ。

行方不明とか？

ていうか、どうしてこんな世界にきたんだろっ。

わからない。

わからないことばかりだ。

早く帰らなきゃな……。

そう思っていると千鶴ちゃんが浮かんだ。

朝のこと、怒ってるのかな……。

はっきり言って悩むようなことではないのかもしれないけど、目を
そらされると傷つく。

帰ってきたら謝ろう……。

ところで町になにをしに行くのだろう？

ここからでは声が届かないのでついたら聞いてみよう。

下を見るとめまいがした。

・・・見るんじゃなかった・・・。

風の音を聞きながら夢の世界へ入っていった。

9 話町に行こう（後書き）

町に行こう、といったんですけどいくのは次回になりそうです。最近評価をくれる人が出始めました。とてもうれしいです（二人ですが笑）どしどしコメントしてください。

10話無職で食っていきのはじかい(前書き)

舞子視点再び(笑)

10話無職で食っていくのはつらい

町らしきものが見えてきた。

凜太郎は・・・熟睡中。

「凜太郎。もう着くよ。」

応答なし・・・。

そのときドラゴンが急降下した。

慣性の法則にのっとり髪が立ち上がる。

「うおお!？」

そりゃ寝起きで地面が迫ってくればびっくりするわな・・・。

地面が近くなると急に空中で一時停止し、ゆっくりと着陸した。

降りたところにはドラゴンとラヴェルさんが立ってた。

「おかしい声を上げてないで早く下りろ。」

ラヴェルさんがあたしたちに背を向けて歩き出した。

少し街道をあるくと村より何倍もおっきな門がみえてきた。

「ひゃ。おっきいねえ...。」

あたしは門を見上げながら門をくぐった。

すると、向こうから来た人にぶつかってしまった。

「あつ、ごめんなさい。」

頭を上げると前に立っていた人の姿が見えた。

「いえ…。」

男の子だった。7、8才ぐらいかな…。

そのまま男の子は歩いて行った。

・・・でも子供にしては丁寧な言葉使いだな・・・。

・・・って凜太郎たち行ってるし！

「待って〜。」

そついうと二人は立ち止まった。

「ここではぐれたら帰れないと思えよ。」

ラヴェルさんあんた怖いよ・・・。

「ところでどこにいくですか。」

凜太郎。ナイス質問！

「仕事探した。」

「へ？」

「お前たち。これからどうするか何も考えてないだろ？」

何も考えてない、という言葉にムツとしたがスルーしておいた。

「村ももう若い働き盛りももう少ない。そこに客が四人。どういうことかわかるか。」

「若い子がきて楽しいな？」

「つまりただで養うのは難しい。よって働けということか……。」

「そうだ。」

あたしの答えはスルー？

「働かざる者食うべからず……。」

凜太郎が呟いた。

「簡単にいえばそういうことだ。」

「で、具体的にどこに行くんですかあ。」

「うむ。ギルドだ。」

ギルドっていえば職の受付をしてるところのことよね・・・。

「ま、実際に入ればわかる。百聞は一見にしかずだ」

このせかいにもことわざってあるの？

中にはいるとバーのような木造の部屋が広がった。

男A「ナッツと酒をくれ。」

男B「依頼金はいくらになる？」

男C「仕事はしっかりするさ。」

いろいろな会話の断片が聞こえてきた。

ワイワイガヤガヤという擬音がぴったりのにぎやかさだった。

「オヤジ。仕事あるか？」

「おおラヴェル。よく来たな。そっちは？」

バーでグラスを吹いていたダンディな50前後の男性がこちらを見た。

「村に居候してる連中だ。」

「どうも。」

「ふむ。で、仕事だったかな、そうだな・・・。」

使い古して黄ばんだボロボロの紙をめくっていたオヤジさんの手が止まった。

「これなんかどうだ？屋敷の掃除。」

掃除ならできそうかな？

「どこのだ？おやじ。」

「ティーラ教会だ。」

この世界にも宗教があるんだ。

「おまえらはいいか？」

「いいですよ。」

「やります。」

了承の意を伝えると紙にサインを書かされた。

このときに気がついたのだけれどこの世界の文字は形は全然わからないのになぜか意味がわかってしまうという不思議な文字だった。

「舞子……。これ……。」

「不思議だねえ……。」

「教会は町を中心だからな。」

「わかってる。」

ラヴェルさんがそういうと私たちは後についていった。

10話無職で食っていくのはつらい(後書き)

最近忙しくてなかなか書けませんでした。
すみません

11 話初収入

教会に行く途中にすれ違う人たちを観察していたらすごい人……人？がいた。

その人は……ライオンのようなというかライオンだった。

しかも二足歩行。さらに連れの人と話をしている。

「ファンタジーだな……。」

苦笑いをしていると

「なにニヤニヤしてんの？凜太郎？」

舞子が気味悪そうに聞いてきた。

「ニヤニヤなんてしてないし、ただ……あれ見てみるよ。」

「……なるほどね……。」

納得して戴けて嬉しゅうございます。

「どうした？獣人が珍しいか？」

ラヴェルさんが立ち止っているおれたちを見かねて聞いてきた。

「ええ……。というか初めてみました。」

いまだに苦笑いをしながら舞子が答えた。

「おまえらの世界にはいないのか……。まあ、みんな初めてみたらそんなリアクションだ。」

ラヴェルさんはそう言つとまた歩き出した。

「あれが教会だ。」

ラヴェルさんの指差した方向にレンガの洋風な家が見えてきた。

村のバンガロー（小屋）とは大違いだ……。

教会のドアの前に来ると大きさがよくわかった。

修平の家ぐらい？ いやそれ以下か……。

ようするに小さい家だ。

中に入ると、5、6列のイスが左右両方に並んで真中に赤い絨毯が敷いてあった。

「あなた方が仕事を引き受けてくれた方ですか？」

人の良さそうな初老のお爺さんがあらわれた。

たたかう

どうぐ

にげる

・・・じゃなくて、

「あ・・・はい。」

そうそうこついう返事をせねば。

いきなりたたかうなんて選択肢が出たもんだから混乱してしまったよ・・・。

「では三人とも中へどうぞ。」

「いやおれはちがう。」

「えっ!？」

ハモった・・・。

じゃなくて、ラヴェルさん! アンタ仕事俺らに任せて逃げる気ですか？

「昼までには戻ってくる。」

気がつけばドアが揺れていた。

もちろんラヴェルさんの姿はなかった。

あの人あんなキャラだったっけ？

「しっかり働いてくださいね。」

- - - - -
- - - - -
-

そのころ修平たちは村はずれの森で薬草を取っていた。

「なかなか集まりましたね。」

修平くんがはバスケットの中を確認しながら言った。

「これだけあれば十分ね。手伝ってくれてありがとう。」

「いえいえ、毎日おいしいご飯を頂いているんですからこれくらい当然ですよ。」

リリイさんはクスクス笑っていた。

「フフツ。ほめても何も出ないわよ。」

凜太郎たちが必死に仕事をしている中三人は楽しそうに笑っていた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

「これでラストオー!!」

舞子がボロボロの手で雑巾を窓に叩きつけた。

キュッキュッキュッキュッキュッ

神父が満足そうにあたりを見渡した。

「お疲れ様です。いまお茶を入れましょう。」

凜太郎と舞子は椅子にすわった。

「……おわったか？」

ドアから顔をぴよこりと出したのはラヴェルさんだった。

あんだ……どこ行って……え？

驚いたのはラヴェルさんの様子がものすごく疲れていたからだ。

「何してたんですか？」

「狩り。」

狩り……？

「掃除なんかより収入が好いんだよ。」

へへ。まあそりゃそうだな。

「お茶が入りましたよ。あ、ラヴェルさん。戻っていらしたか。しばしお待ちをいまお茶をいれてきます。」

「イヤ、結構です。」

「そうですか……。ではお給料のほうです。」

二つの袋が渡された。

「一人1000ガルドです。」

この世界の通貨はガルドというらしい。

ちなみに、1000ガルドでは野菜が5、6個買えるらしい。

「初収入だ・・・小遣いにしな。」

「え？でもこのお金は食費に・・・。」

「フン、そんなはした金あっても無くても変わらん。」

そのとき神父さんのおでこにうつすら血管が浮かんた・・・。

「俺はここで待ってるから、買い物でもして来い。」

いまの神父さんとここで待つ気ですか・・・。

12 話呪われし妖精（前書き）

評価や感想お願いします。（^| ^）v

12 話呪われし妖精

教会をでて少し歩くと大通りにでた。

「ねえ、凜太郎。」

舞子が珍しく考え込んでいる。

・・・明日は槍が降るかもな・・・。

ゴン！と頭に衝撃が走った。

「痛っ！なにすんだ！」

「あんたが失礼なことを考えているから。」

笑顔が怖い。

「で、さっきは何を言おうとしたんだ？」

じんじんと痛む頭を押さえながら聞いてみた。

「あ、そうだった。あのね、ラヴェルさんはあたしたちに買物に行かせてあげるために狩りに行ったんじゃないかな？」

言われてみれば確かにそうだ。

「無愛想な人だけど、悪い人じゃなさそうだな。」

と、隣をみると舞子がいらない。

はぐれたら最後って言ってたじゃん！

しかし、舞子はすぐ見つかった。

アクセサリーを売っている店の前で固まっていた。

「・・・かわいい。」

舞子はシルバーのブレスレットとにらめっこをしていた。

「いらっしやい。ゆっくり見ていつてね。」

なかからひよろつとした男の人が現れた。
年は二十歳ぐらいでなかなかの長身だった。

「はい。」

舞子は返事をしているものの目は光沢のあるアクセサリーたちに奪われたままだった。

「いつもこうなのかい？」

「まあ・・・。」

苦笑いをしながら答えた。

それから一時間？

やっぱ時計がないと不便だな。

「これにする！」

舞子を選んだのははじめに目をつけたシルバーのブレスレットだった。

「はいはい。１０００ガルドいただきます。」

はいはい、とポケットに手を入れた舞子の顔が青ざめていった。

「落とした？」

と、聞くと、こくりと頷いた。「やれやれ……。」

あきれながら男に代金を支払った。

これで一気に無一文だな……。

われながら甘いな、と思ったがいやな気持ちはしなかった。
「凜太郎ナイスッ！」

ピョンピョンとはねまわる舞子は実に幸せそうだった。

……現金な奴……。

なんだか舞子と一緒にいると苦笑いしてばかりだな……。

そうして、俺達は店を後にした。

「ホントにありがとな。凜太郎。」

「いや、どうせ欲しいものないし。」

そういえば昼食がまだだった。

もう帰るかな・・・。

そのとき、ペットショップらしき店を通りかかった。

「凜太郎。すこし見ていかない？」

舞子の目が俺に拒否権の有無を語っている。

「・・・わかったよ。」

店内は檻に入った小さなドラゴンや牛のような魔物・・・。

何でもありだ。

いろいろ見て回っていると一つだけ元気の無い動物がいた。

そいつはよく見ると・・・人間？体長は15cmぐらいの、蝶のような羽の生えた人間だった。

あまりに元気が無く、羽もしおれているので心配になり檻をのぞき込んでみた。

「アナタは誰？」

鈴のような声がした。

「うわっ！」

「どしたの？凜太郎。」

舞子がこつちに来た。

「・・・妖精？」

「はい。レイラと言います。それよりそちらの殿方。よければ指を檻の中へ入れてください。」

おれはレイラの言うとおりにして檻の隙間に指をつっこんだ。

レイラは俺の指に小さな手のひらを押し当てた。

すると、さっきまでしおれていた羽がはためきはじめ、顔にも生気が漂い始めた。

「ありがとうございます。つかぬことをお聞きますが、アナタ方はこれからどちらへ向かうつもりですか？」

「教会にもどろうかな、と思っていたんだけど。」

「わかりました。お二人とも手をつないでください。」

は？

「つないだよ」

舞子はいつの間にか手をつなぎ、つないだ手を上にあげた。

「じゃあ・・・、行きます!」

いつてらっしゃい。

そう心の中で呟いた・・・気がする。

俺たちは気がつくと教会にいた。

「とんだ帰宅方法だな・・・。」

ラヴェルさんが目の前にいた。

「ありがとうございます。やっとあの檻から出られ・・・。」

レイラは力無く床にひらひらと落ちていった。

「お、おい大丈夫か?」

「魔力を使いすぎたな。普通なら10分程度で治る。だが、こいつはちと厄介だ。弱らせるために印が彫つてある。やたら時間がかかるな。」

「印?」

頭の中ではなマークがメリーゴーランドに乗って回っている。

「印っていうのは呪いみたいなもんだ。いろいろな種類があるがこいつは大気中から魔力を取り込めなくなっている。このままじゃ死ぬな。」

そっけなくラヴェルさんは言い放った。

「助かる方法はないの？」

わらにもすがる思いで舞子はきいた。

俺だって助けられるものなら助けてやりたい。

「可能性はある。」

ラヴェルさんが人差し指をピンと立てた。

「この印は最近のものではない。つまり、こいつは弱って死にかけていたはずだ。しかし、こいつはここに来るときに莫大な魔力を使うワープ魔法を使えた。なぜだ？」

「俺の指に触れたら元気になったんです。」

「なら簡単だ。凜太郎。こいつを手のひらに乗せてみる。」

俺は言われたとおりにした。

すると、レイラの小さな体が光り始めた。

「な……。」

ラヴェルさんが絶句した。

珍しいことなのだろうか？

いや、俺にとってはびっくりなのだが、この世界では？と言っ意味で。

そうこうしているうちに光が消えた。

「ア、アナタ方は・・・。」

「起きた！」

「ワタシは一体何をしていたのですか？」

「ここにワープしてからぶっ倒れたんだよ。」

「で、凜太郎がなんか・・・まあ、助けてあげたの。」

「ありがとうございます。」

レイラは俺の手のひらで小さな頭を下げた。

12 話呪われし妖精（後書き）

ちよつと長くなりました。が、読んでいただいて嬉しいです。感想などいただければやる気及び全てのステータスがUPします。（＾○＾）

13 話当たり前が消えた日（前書き）

読もうとしてくださいありがとうございます！
ではどうぞ（笑）

13話当たり前が消えた日

俺たちはコイラの村に帰るべく、ドラゴンの背中に乗っている。

行くときと違うのは一人人数が多い点だけだ。

「なあ、レイラ。」

「何ですか凜太郎サン。」

舞子が爆睡している以上俺の肩の上に腰掛けているレイラに話し相手になってもらうかな……。

「お前が檻の中にいたときにどうして俺に助けを求めたんだ？あのとのお前は俺に触れたら助かるって分かっていたみたいだったけど。」

おお。我ながら暇つぶしの質問にしてはなかなかいい質問だな。

「そんなの決まっているじゃないですか。それは凜太郎サンの体に莫大な魔力が流れているからですよ。」

レイラは当たり前のように言った。

「それは他の人には流れてないのか？」

「はい。少なくともワタシははじめて見ました。」

おいおい……。ここに来て衝撃の新事実！ってか？

「あと・・・。」

「なんだ？」

「ワタシたち妖精は魔力が無いと死んでしまいます。しかしワタシは見ての通り、印の呪縛により自分で魔力を回復できない状態です。」

「そりゃ難儀なことだ。」

レイラは俺の言葉を無視して話を続けた。

「そこで、魔力の固まりともいえる凜太郎サンに直接魔力を流し込んでいただくというわけです。」

「それを俺が拒否したら？」

冗談混じりできいてみた。

「生き抜くためなら何でもします・・・。」

「じよ、冗談だ。」

危なかった。

レイラの後ろに黒いオーラが出始めてた。

「つまりずっと一緒にいなくちゃならないってことか？」

「ま、まあ・・・。そうなります・・・。」

なぜ顔を赤くする。

たしかにお前はかわいい顔をしてはいる。が、体長15cmの小動物だぞ、お前。

「痛ッ！」

頬に痛みを感じた。

レイラが小さな手を存分に使ってつねっていた。

「凜太郎サンが失礼なことを考えているからです。」

あれ？前にもこんなことがあったような・・・？

「痛い痛い！分かった分かった、ごめんごめん！」

ピンポイントでつねってくるもんだから痛い何の。

レイラが解放してくれた頃には頬に赤い小さな後ができていた。

頬をさすっていると前のドラゴンがスピードをゆるめて隣についた。

「凜太郎。見る。」

ラヴェルさんはし下を指差した。

言われたとおりに下を見ると、大きなドラゴンが歩いていた。

「うわ・・・。」

まさかこれだけのために話しかけてきたのか？

「歩いてきた方向をみる。あっちは薬草がたくさん生えているところだ。」

ラヴェルさんが何を言いたいのかわかった。

「まさか……。」

「とにかく降りるぞ。」

俺達はすぐに地面に着地した。

「舞子。起きろ。」

「……。」

ダメだこりゃ。

「舞子はここに置いていこう。」

舞子をドラゴンとともに残してラヴェルさんと俺は薬草の生えている地帯へむかった。

「どんな結果であろうと、取り乱したりするなよ。」

「はい……。」

もちろんそんな自信はない。

近づいたところ女の人の泣き声が聞こえた。

「まさか・・・。」

俺は気づけば走っていた。泣き声の聞こえる方へ。

誰か倒れている？

リリイさんではなさそうだ。

「凜太郎。」

修平がいた。

倒れているのは千鶴ちゃんだった。

「うそ・・・だろ？」

乾いた声が出た。

そこには服の腹のあたりが赤く染まった彼女がいた。

「起きろよ！起きてくれよ！」

気づけば上体を起こして、肩をゆすっていた。

「まだ息はあるようだが、もう・・・。」

修平が申し訳なさそうに言った。

いつも四人でいた。

ふと気づけば隣には彼女がいた。

それが当たり前だった。

その当たり前は儚く消え去った。

「凜太郎君、動かしちゃダメ。」

リリイさんが俺を止めてきた。

眼は赤くはれていた。

「うるさい！」

そうして俺は彼女の体を抱きしめていた。

自分の服が汚れるのも気にせず、ただ抱きしめていた。

そして、吠えるように泣いた。

13話当たり前が消えた日（後書き）

前話に書き間違いが見つかりました。

読みにくくなってしまうかもしれませんでした。

さて、前半から後半への温度差が激しい形になりました。
もうファンタジーどころじゃなくなってきました。

千鶴の命は消えゆくのか？

次回をお楽しみに。

感想・評価お待ちしております。

第14話サヨナラ

「千鶴はもう助からない。」

ラヴェルさんがいつの間にか後ろに立っていた。

「最後まで一緒にいてやれ。」

「凜太郎ー！……！？」

舞子が息を飲んだ。

「嘘……？」

「……これ千鶴にあげる。」

舞子は左腕につけていた銀のブレスレットを千鶴の左腕につけた。

すると凜太郎の腕の中の千鶴が光りだした。

「千鶴……。」

光は粒子状になり天へ昇っていった。

凜太郎の腕は抱いているような形のままだった。

「……てた。」

「え？」

俺はよく聞き取れなかったので聞きなおした。

「千鶴ちゃん笑ってた。」

「・・・そうか。」

「好きだって言っておけばよかった。」

俺は凜太郎の頭をくしゃくしゃにした。

そうするとまた凜太郎は泣き出した。

こいつは小さい頃からこうだった。

泣きたいときに泣き笑いたいときに笑う素直な奴だ。

俺は涙も出ない。何故なんだろう？悲しいのにな。

「村に帰ろう、みんな。」

リリィさんはいつまでもここにいるべきではないと思ったのだろう。

「俺はドラゴンたちを置いたままだから取りに行く。」

「じゃあ、帰ろうかみんな。」

凜太郎は動かなかった。

俺は足を止めた。

「・・・リリイさん。先行っててください。」

「でも・・・分かったわ。でも暗くなる前には帰ってきて。」

「はい。」

そうしてリリイさん、ラヴェルさん、舞子が去り、俺は凜太郎と共に残った。

「修平。」

「なんだ？」

「俺・・・。どうしたらいいんだろう。」

凜太郎は前を向いて座ったままだ。

「帰ろう。」

「どこへ？」

「俺らの世界へだよ。」

「お前は何かあっても帰らなきゃいけない。」

「ああ。」

その後二人で墓を作り花を供えておいた。

村に帰ると、舞子は千鶴のベッドで寝ていた。

枕は涙で濡れている。

凜太郎もすぐに寝た。

今日は満月だった。

「千鶴ちゃん、守ってやれなかった上に泣けなくてごめんな。」

修平の頬にひとすじの光るものが流れた。

「遅えよ。」

修平はただ誰に言うでもなくつぶやいた。

その夜は本当にきれいな満月の見える夜だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1104f/>

ファンタジア

2010年10月20日14時00分発行